論説

父親論の現在

寺岡聖豪

○「父性の復権」を巡る議論

林道義氏の『父性の復権』（中公新書）が出版されて三年余りになるが、同書を契機にして、父親・父性に関する議論は活況を呈している。同書は出版後、数多く書評で取り上げられたこと[1]からも、その注目度の高さは容易に想像がつくだろう。その内容を簡単に纏めれば、次のようになる。今、「父が父の役割を果たしていない。家族を統合し、理念を掲げ、文化を伝え、社会のルールを教えるという父の役割が消えかけている」（林道義　一九九六、一頁）。その結果、社会ではさまざまな問題が起こっている。だから、「父性」の条件として、次の五つが今、求められるという。（一）まとめあげる力をもっていること、（二）中心となる理念をもって文化を継承すること、（三）全体的客観的視点をもっていること、（四）指導力、（五）愛をもっていること（前掲書、七五頁以下）。

このような主張に対して、さまざまな受け止め方がなされている。たとえば、小浜逸郎氏は書評として、次のように述べる。「これはまさに出るべくして出た本という感じがする。という意味は、必ずしも手放しで絶賛するという意味ではな

い。最近の日本社会は、アノミー（無秩序）とアパシー（無気力）がひろがり、規範意識そのものがぐちゃぐちゃに融解してゆくような印象を人々に与えている。それを何とかしなくてはという問題意識に、この本はぴったりとマッチしているのである」（小浜逸郎　一九九七）。小浜氏は林氏と社会状況（父性の喪失、父親の機能不全）の認識を共有するとともに、このような社会状況を何とかしなくてはならないという林氏の問題意識に賛同を示しているように思われる。

次に、いくつか提起されている批判的な意見を見ていくと、たとえば河合隼雄氏は「『父性の復権』などできない」において、次のように述べる。「もともと日本に『強い父親』はいなかった。『父性』は復権ではなく創造すべきものなのだ」（河合隼雄　一九九七、二六二頁）。なぜなら、「日本は心理的には母性優位の国で、欧米の父性優位と対照的な社会構造になって」おり、「個人の個性や自己主張を尊重するより、場の調和を重視するというのは、まさに母性原理が強いから」（前掲書、二六七頁）だという。また、賀茂美則氏は『父性の復権』をばっさり切り捨て、林氏の主張に対して極めて懐疑的な見解を述べている。賀茂氏によれば「本書を読んで感じたのは、学問的な裏づけがほとんどない、ということであった。社会学でなければ、心理学でもない。ましてや精神医学でもない。例えば、この本で取り上げられている『父性』なるものは本能なのか、そうでなければどこから来るのか。『父性』の定義と由来をはっきりさせないのは学術的とは言いかねる」（賀茂美則　一九九八、一二九頁以下）。

林氏の『父性の復権』に対して、このようにさまざまな評価はあるものの、同書は注目度の高さから判断して、現在の「父性の復権」に関する議論のきっかけとなったことには異論がないだろう。[2] そして、これらの父親論は論者によって、日本人論や指導者論などへ展開されているように思われる。また、男女の役割が現在、「男女共同参画社会」の実現に向けて見直されるなかで、父親の子育てへの参加を求める声は次第に強くなってきている。[3] したがって、行政やマスコミなどによって行われている「父親の子育てへの参加」に関する啓発活動は、「父性の復権」に関する議論との関わりにおいて見落とすことができないだろう。

そこで、本稿は「父親・父性とは何か」を考える予備作業として、「今、なぜ父親・父性が議論の俎上にのせられるの

か」、そして「今、なぜ『父性の復権』が声高に叫ばれるのか」、その背景を明らかにする。言い換えれば、「父親論はどのような出自（文脈）において、どのように語られているのか」、その背景を考察したい。[4] というのは、現在、我が国では一〇〇人いれば、一〇〇通りの父親論が交わされるような状況にあるので、これらの父親論を整理し、吟味する必要があるように思われるからである。以下、欧米の議論も視野に入れながら、父親論を巡る状況を考察していくこととする。

一　「父親論」の時代

藤川信夫氏によれば、「ミッチャーリヒの『父親なき社会』（独一九七二年／日一九八八年）以降、父親の不在について論ずることが一つの流行となったように見える今日、一方で、父親は、何か失われた（あるいは失われるべき）ものとして、逆に言えばかつて存在した（あるいは、今なお残存している）実体として論じられることも多い。例えば、父親に関するハウ・トゥーものによく見られる『父親の復権』を巡る論議の背後には、こうした父親に対する実体化あるいは――否定的意味における――神話化の作用が潜んでいる。他方で、特に父親の役割・機能等に関する実証的研究はかなり豊かであるが、その背後にもやはり実体として捉えられた父親に対する賛否の感情が見え隠れする」（藤川信夫　一九九六、四一頁）。

この指摘にしたがえば、父親を巡る最近の議論の動向は大きく二つに分類できるようである。一つは、父親に関するハウ・トゥーものであり、もう一つは父親の役割・機能等に関する実証的研究である。前者に該当するものとして、管見によれば、次のものが挙げられる。たとえば「父性なき父親が、子どもを歪ませる」という久徳重盛氏の『父原病』（一九九七）である。また団塊世代の作家、三田誠広氏は『父親学入門』（一九九五）のなかで、自らの体験を踏まえて、父親のあり方を論じている。また、サイコセラピィの実践に携わるなかで、「父の不在」が今日の日本社会の問題であると指摘したのは、東山弘子氏と渡邊寛氏の『「父」をなくした日本人――知恵としての「父」の発見――』（一九九五）である。後者（父親の役割・機能等に関する実証的研究）に該当するものとしては、次のものが挙げられる。たとえば、アメリカ・（旧）西ドイ

ツと比較して、「日本の父親と子供」の実態と意識を調査した「子供と父親に関する国際企画調査」報告書（一九八八）である。また、柏木恵子氏（編）の『父親の発達心理学――父性の現在とその周辺――』（一九九三）がある。柏木氏らは「父親再発見の時代とさえ呼ばれるここ十数年来のアメリカを中心とした父親研究が、社会的文化的な思潮のなかで、ジェンダーやアンドロジニー（両性具有　Androgyny）などを背景に、性別にとらわれない発達観の重要性を提示してきた」ことに示唆を得たという。そして、四人の研究者が心理学、社会学、教育学、文化人類学、女性学などを視野におさめて、現代社会の「父性学」を展開している。また、高橋種昭氏らによる『父性の発達――新しい家族づくり――』（一九九四）は「父性の不在」や「父親の役割」が社会において、幅広く関心を集めるなかで、家族のなかにおける父親の地位と役割を考察している。また、高野清純氏と新井邦二郎氏（編）の『モノセクシャアル時代の父親学』（一九九七）は男女の役割や服装などのボーダーレス化が進んだ社会の現状を踏まえて、発達心理学の立場から「父親学」を論じている。

これら最近の父親を巡る論議から導き出された「結論を並べてみれば、今日父親について確実に言えることは、『確実に言えることが何もない』ということであるようにさえ思われてくる」（藤川信夫　一九九六、四一頁）。とはいえ、一九八〇年代後半から、様々な領域において、我が国では父親を巡る議論が盛んに行われ、新たな父親像の提示が試みられているように思われる。この背景には、「父親・父性に関する基本的な認識が崩れた」、言い換えれば、「今まで、当たり前のものされてきた父親・父性の地位や役割が自明ではなくなった」ことが共通理解として考えられる。したがって、今日ほど、「父親になる」ことが難しい時代はないといえよう。(5)

二　「男になる」ことの困難さ――男性学の問題提起――

現在、困難なのは「父親になる」ことだけではない。「男になる」ことも、難しくなっているように思われる。たとえば、一九九一年、関西で「メンズリブ研究会」を結成し、「男性学」の授業や講演を担当するようになった伊藤公

雄氏は、次のように述べている。「若い男性の〝冬彦さん現象〟や、〝シャイマン・シンドローム〟。〝結婚したくてもできない独身男性〟の増加。働き盛りのサラリーマンの〝過労死〟や〝自殺率の急上昇〟。また、熟年男性の〝定年離婚〟。妻に依存するだけの〝濡れ落ち葉族〟や〝ワシ男〟などの老年男性の生活問題……。／まさに、現在は〈男性問題〉の時代なのだ！」（伊藤公雄　一九九六、二頁）。

これらの諸現象は、男たちの〈男らしさ〉への〝こだわり〟によって引き起こされたという。伊藤氏によれば、「『〝客観的で合理的〟な視点をもち、泣き言を言わず一人で堪え、他者、とくに女に対して庇護（ほんとうは支配）できる力をもっているのが一人前の男である』といった、〈男らしさ〉への男たちの〝思い込み〟によって、女たちはこれまでさまざまな『迷惑』（というより被害）をこうむってきた。しかし、男たちは、女性たちの批難に耳を貸さず、この重く窮屈な〈男らしさ〉の鎧を、ときには生命を賭けて守ってきたのである。／しかし、現在、女性たちの平等を求める声の中で、男性にとって、この〈男らしさ〉への思い込みと生活スタイルをめぐって見直しが迫られている。女性問題の深まりに対応して、男性問題の時代がはじまったということだ。〈男性学〉は、この時代の要請にこたえるべくして誕生したといってもいいだろう」（前掲書、四頁）。

このように、男性学は「男たちの〈男らしさ〉へのこだわり」を軸にして、社会や文化を解読しようとしている。ボーヴォーワールの「人は女に生まれない。女に生まれるのだ」に倣っていえば、「人は男に生まれるのではない」と言えるかもしれない。[6] それゆえ、女性学ないしはフェミニズムが「『女性の視点』を超えて、性の平等と自由を求めて」（瀬地山角　一九九五、二二七頁以下）、ジェンダー論を展開しているように、男性学も同じく「男らしさ」のジレンマを考察するなかで、「男と女の開かれたコミュニケーションの実現」を目指しているように思われる。

その意味では、『母性という神話』（一九九一）において、母性本能の神話性を論証し、母子関係や女性のあり方に再考を促したバダンテール氏が、『男とは何か』（一九九七）において男性問題を取り上げ、「父性革命」（バダンテール一九九七、二一四頁以下）を主張している点は興味深い。

バダンテール氏は前書、『母性という神話』において、いわゆる「母性愛」が本能ではなく、母親と子どもの日常的なふれあいの中で育まれる愛情であるという。そして、母性愛を本能とするのは、父権社会のイデオロギーであり、近代が作り出した幻想にすぎないと結論づけた。同書はこのような刺激なメッセージを有するがゆえに、女性や母子関係のあり方に関する議論に一石を投じることになった。このバダンテール氏が『男とは何か』において、「男」がどのようにして成り立っているのか、その男が直面している困難が何に由来するのかを考察している。

同書によれば、人間が男になるか、女になるかは、二三組目の染色体がＸＹか、それともＸＸかによって決まる。Ｘがなければ人間にはなれない。ところが、Ｙは男性アイデンティティを決定づけるものではないという。現在、一般的には生物学的な性差に応じて、ジェンダー現象（男らしさ、女らしさ）が存在すると考えられている（バダンテール　一九九七、四〇頁以下）。しかし、啓蒙時代の一八世紀以前は、これとは反対に、社会的、文化的な性差がまず存在し、身体的な差異はそれに付随するものと考えられていたようである。言い換えれば、「男である」とはまず「男らしく」振る舞うことであった（前掲書、一五頁以下）。

したがって、男は「男らしさ」を獲得するために、努力しなくてはならない。バダンテール氏が強調するのは、「男になる」ことは「女になる」ことよりも、はるかに困難を極めるということである。「男とは何か」があまり問題とされなかったときは、フランス語でも、英語でも、「人間」と「男」は同じ言語であった。これは、男性が社会の中心に位置し、特権的な性であることを示す証左にほかならない（前掲書、一〇頁以下）。

母胎から生まれる子どもはみな、原初的には母と癒合状態にあり、まずは女性性を帯びている。それは心地よい受動性の状態である。ヒトは「母ではない」や「赤ん坊ではない」、「女ではない」というように、この原初状態を否定することを通して、初めて男になれるのである（前掲書、四五頁以下）。そしてバダンテール氏によれば、近代は男にとって受難の時代であるという。なぜなら、モデルとされる父親との同一化は、原初的な女性性から離脱することを意味していたが、工業化によって、家の外で働く父親は家庭から離され、男性としての権力を息子に提示できないからである。また、フェミ

ニズムは男性中心社会の問題点を告発している。そのため、バダンテール氏の言葉を借りれば、男たちは防衛反応をとり、過剰に「男らしさ」を強調する「鉄骨男」（例、映画『ターミネーター』）となるか、「男らしさ」の欠如した「骨抜き男」（例、ピーターパン）になるかというように、両極に分解してしまう。「鉄骨男」には原初的な女性性が切り落とされているし、「鉄骨男」には男性性が切り落とされていて、男として、不適格であるとされる（前掲書、一六二頁以下）。

バダンテール氏はこのように「男」がどのようにして成り立っているのか、また、その男が直面している困難が何に由来するのかを考察している。そして、この困難を乗り越える方法の一つとして、誰もが男性性と女性性の二つの要素をもち、それを融合させることが必要だという（前掲書、二〇八頁以下）。このバランスのとれた男、アンドロジニーはまた父親としても、理想的である。『男とは何か』によれば、「自分の両性性を演じることができるような男でなければ、良い父親にはなれない」からである。その「良い父親」の一例として、「母親のようにふるまったかと思うと次にはラグビーをする」父親が挙げられている（前掲書、二一五頁以下）。

ここに、男性学に依拠した父親論の試みを読み取ることはできるだろう。それは「母性愛」の解読と同じように、近代社会が作り出した父親像を批判的に捉えることによって、父親・父性をその根底から問い直すものであった。

三　霊長類学からのアプローチ

さて、父親・父性への根本的な問いかけとして、私見によれば、霊長類学からのアプローチと歴史人類学からのアプローチが今、なされているように思われる。

前者としては、たとえば、山極寿一氏による『家族の起源――父性の誕生』（一九九四）や『父という余分なもの――サルに探る文明の起源』（一九九七）などが挙げられる。霊長類学者である山極氏によれば、人間の家族は実に不思議な社会単位であるという。一見、動物の小集団は人間の夫婦家族に似ているように思われるが、私たちの家族とは異なっている。

類人猿は多くの点で人間に非常に近くても、そこには家族と呼べる社会単位は存在しないのである。そこで、サル学者たちはホミニゼーション（ヒト化）研究として、家族の起源を研究してきたという。そこで、問題とされたのは、「いかにして人類は、類人猿に似た社会からいくつものギャップを乗り越えて、真に人類的な社会を構築することができたのか」である。そして、霊長類学者たちが確信したのは、「初期の人類が抱えていたであろういくつもの課題のなかで、家族という社会単位の創造はその長い進化の道のりでもっとも象徴的なできごとだったにちがいない」ということであった（山極寿一一九九四、i頁以下）。

「家族の起源を探る」という課題はそもそも一九世紀後半から二〇世紀半ばにかけて、社会進化論として盛んに議論されてきた経緯を有する。それは、各々、異なった文化をもった諸地域をフィールドとして、そこでの家族の形態を比較調査することによって、家族の起源に迫ろうとする試みであった。しかし、当たり前のことではあるが、それぞれの文化に優劣をつけられないように、どの家族の形態が原型であり、発展型はどれかを分類することは不可能であった。また、「家族の形態を探る」場合、どうしても自民族中心的な（ethnocentric）発想に陥りがちで、この点は大いに問題とされた。

そこで、このような陥穽に陥らないために、山極氏は霊長類学者として、「現在の家族から過去に遡るのではなく、サルや類人猿にみられる人類の祖先がつくりあげた社会の原型へと到達しよう」（前掲書、ii頁）と試みたという。そして、『家族の起源――父性の誕生』において、「類人猿と人類の共通の祖先から人類の直系の祖先に至る進化のストーリーを描」こうとした。

ここでは同書の内容を詳しく論じる余裕はないので、家族の成立と父親との関係を簡単に説明したい。山極氏によれば、「人類の社会は特定の男と女がつねに同居できるような閉鎖的な集団ではなかっただろう。むしろ人類は、なわばりを解消し同性同士の連帯を強めて、個人がいくつもの集団に属せるような可塑的な社会を目指したはずである。このため、父性は同居と近接によってではなく、約束あるいは契約によって保証されねばならなかった。これが人類的な父性の始まりである」（前掲書、一四八頁）。そして、「やがて父性は配偶者間の認知から集団全体の認知へと発展し、父親の存在を介して世

代は構造化される。世代は横の広がりをつくり、インセストは縦の広がりをつくる。これらは集団の規則として徹底され、集団は複雑に分節化して親族と外婚の枠組みが形成される。その変化が必然的に家族の登場を促すことになったのである」（前掲書、一四八頁）。

この「家族の登場」を決定づけたのが、食事だった。というのは、採食が個人的な行為であれば、食は社会交渉ではないが、「食事が親睦を深める社会交渉として発達してくると、そこには性的な意味が生じるようになった」（前掲書、一六七頁）からである。そして、人類の性交渉は遊びと同じように、男女が力のバランスをとりながら快楽の文脈を作り上げる交渉へ変容していった（はずである）。この点、食べ物を分配する行動と性交渉はその性格がよく似ている。「食事が性のメタファーである」といわれるのは、ここからみても容易に想像がつくであろう。

「人類の女は性的な受容性を高めて、日常的に性交渉が可能なように進化しつつあった。分配行動が与える者と与えられる者に快の感情を共有させ、男女の親睦を深めることに貢献すればするほど、分配行動は性交渉を誘発する起因になりやすくなる。人類の性交渉にも贈物がつきものだし、食事をともにすることは性交渉への誘いや了解を意味していることがある。初期の人類は共食を習慣にすることによって、多様な異性の組合せが生じたにちがいない。これは乱交的な性交渉を助長し、多くのトラブルを引きおこす原因になった。そこで人類は、食の共有を性交渉の独占が認められる関係と性交渉がおこりようがない関係に限定せざるを得なくなった。すなわち、同性同士、配偶関係にある男女、親子という関係である。現在の人類にも『共食家族』という言葉があるように、家族は食事の場から性の性格を払拭しようという試みのうえに成立している。そして、食事が文化の産物であるように、家族の基本的性格を定め、家族の構造を決定したのは文化的な存在である社会学的父親の登場だった」（前掲書、一六七頁）という。

引用が長くなったが、山極氏によれば、「特定の雌雄が長期にわたって配偶関係を維持する」、「母親と娘が同じ相手と繁殖を行わない」、「父親と息子もまた同じ相手と繁殖を行わない」という特徴によって、「社会学的父親」が誕生したわけである。ここに、霊長類学は家族の起源と父親の誕生を見いだしたといえよう。そして、「現代の人類社会が、いまだに社会

学的父親を有する親族の構造を捨てていないことは、この発明がいかに人類の文化の隅々にまで行き渡ってきたかを示唆している」（前掲書、一八四頁）のである。

四　歴史人類学からのアプローチ

続いて、父親・父性への根本的な問いかけとして、歴史的父親研究を挙げておきたい。とはいうものの、父親の歴史を体系的に考察した研究とても少ないように思われる。管見によれば、前述のレンツェン『父親』（一九九一）のほかには、Tellenbach『西洋における父親像』（一九七八）や原聡介「父の座――その変遷と教育的役割」（一九八三）、Wild『父親の理性――児童文学を例にした、ドイツにおける市民的なものと啓蒙主義についての心理描写――』（一九八七）、ホルクハイマー『批判的社会理論』（一九九四）に収められた「権威と家族」などを歴史的父親研究として挙げるにすぎない。このように、欧米でも、我が国でも、父親の歴史に関する体系的研究は少ない。前述したように、これこそが、現在、「父親について確実に言えることは何もない」状況を生み出しているように思われる。

ここでは、数少ない父親の歴史を取り扱った『父親――家父長から扶養費支払義務者へ――』（一九九一）を見ていくことにする。「『父親』におけるレンツェン氏の基本的な方法論的観点は構造主義的な関係史である。すなわち、性別、人生諸段階等によって人生がいかに言説上差異化・分節化されてきたかを解明しようとする歴史的再構成である。こうした観点のもとで、父親は、個々の文化や時代の言説構造における諸要素間の関係によってはじめて当の言説構造内で固有の位置を獲得するような、恣意的・相対的な意味の束とみなされる」（藤川信夫　一九九六、四一頁）。

このような観点から、レンツェン氏は旧石器時代から現在までの父親に関する言説を考察し、父親の役割を以下のような歴史区分に整理している（Lenzen 1991, Tafeln）。

さて、父親がいるならば、誰でも、父親との関係を有するわけではない。というのは、父親は死や別離などの様々な理

由によって、不在であるかもしれないからである。そして、このような不在こそが父性を特徴づけてきたのである。たとえば、父親の役割は「創造者」(Genitor) として考えられたり、子どもの「生産者」(Erzeuger) として考えられた。また、父親の役割は出産前と出産後それぞれに想定されてきた。表から、このようなことを読みとることはできるだろう。

ここでは個別に検討する余裕はないので、後に述べる「近代家族」との関係に限定すると、一七・一八世紀（絶対主義・啓蒙主義）が父親の役割の転換期として、重要である。というのは、この時代において「直系子孫という考え方が根本的に疑問視されはじめ、父親が家の外で生活時間を売り、家族の扶養義務を引き受けるための手段を入手することによって、父親の機能の多くが多様化した父親代理人へと譲渡されてゆく」（藤川信夫　一九九六、四二頁以下）からである。父親は外での活動を通して扶養機能を担ったり、精神的に後見役を果たす意味での養子縁組的機能をもつ以外は、家の運営をほとんど母親に委ねるわけである。そして、一九世紀には『エミール』における同性間の教師＝生徒関係は母親と息子という異性関係に転換され、母性が重視されるようになる[7]（Lenzen 1991, S. 188ff.）。父親の地位と役割はこうして、次第に希薄になっていく。このことが前述したように、今日、「父親の不在」として嘆かれる発端となっている。そして、現在の「新しい父親」を巡る議論[8]につながっていくのである。

また、表を見る限りでは、父親の役割は様々に変遷していくものの、父親の役割が全く不要とされた時代は存在しない。したがって、「父親の不在」が嘆かれる時代は他の時代と比べて、男性や夫に対して常に「父親になる」ことをより強く迫ってきたといえよう。まさに、男性や夫は「父親の不在」が顕在化するようになった時代にこそ、「父親になる」ことが「脅迫」されるわけである。「父親論」が現在、活況を呈しているのは、このように「父親になる」ことを強く迫られている結果とも考えられる。

表　歴史的過程における父親の機能の細分化と推移（言語分析の成果の概観）

時　代	旧石器時代（ほぼ紀元前 8000 年まで）	新石器時代（ほぼ紀元前 8000 年まで）	古代イスラエル（ほぼ紀元前 1500—500 年）	古代ギリシャ（ほぼ紀元前 2500—64 年）			古代ローマ（紀元前 753—ほぼ紀元 300 年）
				叙事詩時代	スパルタ	古典時代	
父性に関する言説における精神的な機能受容		認知機能 子孫の基礎づけ	養子縁組・認知機能				
		後援者的機能	家父長的な，とりわけ扶養機能	家父長的機能，身分，家族，財産の保護			家父長的機能（家族の父親）扶養者的機能
		教育的機能	教育的機能	教育的機能	教育的機能		
実の父親の機能	世話人機能，実の父親によって（偶然に）	神的機能	神聖な(numinos)機能	神的・創造者的機能	神聖な機能		（転用された）：建設機能（ローマ）
			父親らしい・強調された機能	《父親らしい》機能			
						世襲機能	世襲機能（相続権）
						嫡子保証機能	
		遺伝学的機能	遺伝学的および遺伝学的・精神的機能				遺伝学的機能

時　代	旧石器時代 （ほぼ紀元前 8000 年まで）	新石器時代 （ほぼ紀元前 8000 年まで）	古代イスラエル （ほぼ紀元前 1500—500 年）	古代ギリシャ（ほぼ紀元前 2500—64 年）			古代ローマ （紀元前 753— ほぼ紀元 300 年）
				叙事詩時代	スパルタ	古典時代	
実の父親以外の者によって引き受けられる（父親の機能）				実の子供でない者に対する社会的機能			
							扶養機能：親族
	世話人機能 他者によって（偶然に）						
					教育者的機能：愛人		

時　代	初期キリスト教時代（紀元45—ほぼ400年まで）	中　世（375—ほぼ1500年）	宗教改革時代（16世紀）	絶対主義と啓蒙主義（17および18世紀）	19世紀 中産市民	19世紀 プロレタリアート（1890年まで）	20世紀（1890—1990年）
父性に関する言説における精神的な機能受容							
	養子縁組機能（神の息子たちとして）			養子縁組的・受け入れ機能・精神的後任			
		家父長的機能と扶養機能と同一になる	扶養機能は隣人愛的行為でもある	権威的機能と扶養機能（家庭外の活動による）	扶養機能		扶養機能
	宗教的父親としての教育的機能	宗教の（教師）としての教育的機能	奉公人に対しても教育的機能	教育的機能：啓蒙の審級としての一家の父			
実の父親の機能	《本質の一致，三つの体質》の構成要素として		両親の神的機能：〈神の代理人〉				
	ユートピアとしての父親的機能		父親的機能（アンビヴァレント）				
	精神化された機能	生殖機能	転用された意味においても生殖機能	生殖機能	生殖機能		生殖機能

時　代	初期キリスト教時代（紀元45—ほぼ400年まで）	中　世（375—ほぼ1500年）	宗教改革時代（16世紀）	絶対主義と啓蒙主義（17および18世紀）	19世紀 中産市民	19世紀 プロレタリアート（1890年まで）	20世紀（1890—1990年）
実の父親以外の者によって引き受けられる（父親の機能）						扶養機能：母親たち，国家，官治国	扶養機能：母親たち，国家
	父親的機能：母親たち		父親的機能：候，国家，母親たち	父親としての機能：政府	父親的機能		父親的機能：（青年）指導者
	神的機能：息子と人間	神的機能：聖母としてのマリア			神的機能：母親たち		神的機能：子供
		教授機能：教師	教授機能：母親たち，教師（女性教師）	教授機能：家庭教師，母親たち	教授機能：国家の教師（女性教師）		教授機能：国家の教師と教育者，メディア
				一家の組織化機能：母親たち	母親たち：内部の組織化		（消滅しつつある）母親たち：内部の組織化
					文化の代表的提示の機能：母親たち		メディア：文化の提示
							生殖機能：医者

（Lenzen　1991, Tafeln）

五　近代家族の解体？

前節で考察してきたように、霊長類学や歴史人類学は父親・父性をその土台から問い直そうとしている。ただし、父親・父性を根本的に考察する試みは何も、霊長類学や歴史人類学だけではないだろう。しかし、これらのアプローチだけみても、これらが単に「父親・父性のあり方」への根本的な問い直しにとどまるものではないことはわかる。それは今まで、自明のものとされていた父親の地位や役割だけでなく、その母胎である家族もまた揺らいでいることを暗示する。その意味では、今、問い直されているのは父親・父性というよりは、むしろ家族なのではないだろうか。

さて、我々が現在、一般に家族イメージとして捉えているものは、家族の社会史的研究によれば、「近代家族」に端を発しているという。その特徴は次のように纏められる。

「①家内領域と公共領域との分離。②家族構成員相互の強い情緒的関係。③子ども中心主義。④男は公共領域・女は家内領域という性別分業。⑤家族の集団性の強化。⑥社交の衰退とプライバシーの成立。⑦非親族の排除。（⑧核家族）」（落合恵美子　一九九四、九九頁）。

これらの諸特徴は現在、我々にはきわめて当たり前すぎて、これこそが家族なのではないかと、かえって不思議に思われるだろう。情緒的な結びつきが強く、家庭生活は子どもを中心にして営まれる。そして、父親が外で仕事をし、母親は家で家事や子育てを行う。一般には、これが「家族」と理解されている。

ところが、今、そのような家族のあり方が問われている。たとえば、出生率の低下や生涯独身者の増加は「家族の危機」として捉えられ、「家族はどこへ行くのか」を巡って、活発に議論が交わされている。「父親になる」ことの困難さと「男になる」ことの困難さはこの「家族の危機」と平行して、父親論や男性学において取り上げられているように思われる。

この点に関して、中野収氏は『「家族する」家族――父親不在の時代というが…――』（一九九二）において、「自然的家

族」か「人為的家族」かを比較することによって、契約的共同生活を未来の家族モデルとして提起している（中野収　一九九二、二三九頁）。そして、父親と母親の関係を再構成するために、役割分担から棲み分けを行うことを模索している（同上、二三一頁）。それは「家族をめぐる新しい状況の下で、男と女の領分ということを考えて、新しい棲み分け」（同上、二三一頁）を行うことである。[9] そして、その具体策として、たとえば汐見稔幸氏たちの試みが考えられる。汐見氏らは『父子手帖』（一九九四）において、父親への子育てへの積極的な参加を呼びかけている。同書は今から「お父さんになる」男性に向けて、子育てのヒントや知恵、知識、考え方をたいへん具体的に提示している。この試みによれば、育児は義務としてやるものではなく、「夫婦のよい関係をつくるためにも、父親に愛してもらったという体験を残していくためにも、そして何よりも父親自身の人間的な喜びのためにもやれるものだ」（汐見稔幸　一九九四、一四三頁）という。ここにも、「家族の危機」から新しい家族のあり方を模索した「新しい父親」像が提示されているように思われる。したがって、「今、父親はどこに向かおうとしているのか」が問題とされているのである。

六　父親論の行方――父親・父性に関する認識枠組み――

近年の父親論の活況を支えるのは、「父性の復権」という主張であろう。それは、一般に「父親は現在、死んでしまった」ような状態にあると言われるからである。だから、「父性の不在」や「影が薄くなった父親の存在」という現状に強い危機意識を抱いて、「父性の復権」が声高に叫ばれている。とはいうものの、「父親はもう死んでしまったのか、それとも、まだ生きているのか」は明確ではない。なぜなら、「父親・父性とは何か」に関して、まだ体系的に考察されていないように思われるからである。また、「父親のあり方」も、ここ数十年の社会動向のみをもとにして模索することはできないだろう。確かに、「新しい父親」として、子育てに参加する父親が今、望まれている。そして、父親が子育てを母親とともに共同で行うという意識は現在、ようやく芽生えてきつつある。バダンテール氏の「父性革命」や斉藤学氏の『「家族」はこわ

い』などはこのような社会動向の変化を敏感に感じ取っているといえよう。しかし、レンツェン氏によれば、父親の役割は普遍的なものではない。確かに、「生物学的な父親」はいつの時代、どの地域においても存在する。しかし、「社会的な父親」や「法的な父親」は時代と地域によって、その現象は種々多様である。それゆえ、父親という存在を宙づりにして、様々な角度から照射することが今、求められているように思われる。その際、父親に関する個別的なアプローチはもちろん必要ではあるが、父親研究全般をカバーするメタ理論的な研究もまた欠かすことはできないだろう。というのは、父親に関する個別的なアプローチの基盤となっている認識枠組みこそ、検討しなくてはならないからである。歴史的父親研究はこの点で、父親に関するメタ理論的な研究の一つとなりうるように思われる。つまり、「時間軸の視点」から時代を遡った父親の具体的な史的位相の解明によってこそ、「父親・父性とは何か」が明らかになり、「父親のあり方」を提示できるわけである。父親論というと、理想的な父親像や父親に求められる資質などに見られるように、「父親はいかにあるべきか」が即座に問われる。しかし、「父親とは何か」という視点を欠いては、求められる父親の根拠は脆弱なものとならざるを得ないだろう。

繰り返しになるが、「父親・父性とは何か」を問う基準は様々に想定されうるだろうが、父親のハウ・ツゥーに関する考察だけでなく、父親論を俯瞰するような視座もまた必要であろう。その試みの一つとして、父親・父性に関する認識枠組みを歴史的に検討することが求められているように思われる。

注

（引用に際しては後掲の文献一覧によって、著者名、出版年、ページ数のみを記した。）

（1）『父性の復権』は現在、書評として新聞八紙、雑誌三誌で取り上げられている。なお、これらの書評記事は同書の編集者、佐々木久夫氏のご厚意により入手できました。

（2）最新の「父性の復権」を巡る論議は、以下の通りである。

本文中でも触れたように、林道義氏（『諸君！』）と河合隼雄氏（『文藝春秋』）、賀茂美則氏・妙木浩之氏（『論座』）との間では「父性の復権」を巡って、論争が繰り広げられている。

これ以外には、『大航海』（№一九、一九九七）において、『特集「父」の歴史』が組まれている。同誌には、「対話　父の起源　岸田秀×山極寿一」、大澤真幸「父について――父性を否定する父性――」、原章二「父と言語――『父』としての言語から『父』のない言語へ、あるいは人類学と言語学の間をぬってオースチンの小説へ――」、「対話　歴史としての父――社会史への新しい視点――網野義彦×宮田登」などの論考が掲載されている。『論座』（一九九八年一月号）には、賀茂氏のほかに、妙木浩之「父親たちの居場所をどこに求めるか」が掲載されている。

また、比較家族史学会第三二回研究大会（一九九七年一一月一五・一六日、名城大学）は、「父親論――父権・父性を問う」というテーマで、一〇人の報告をもとにして開催された。山極寿一「家族の自然誌――父親の起源――」、寺崎昭弘「一八、一九世紀イギリスの父親像――その強迫性と不安――」、舟橋恵子「父親役割の三類型――北欧・フランス・日本の父親論からジェンダーの比較社会学へ――」など。

いささか古くなるが、『児童心理』の一九八三年一月号では、「子どもにとって父親とは」という特集が組まれている。ここでは、たとえば、小嶋秀夫「子どもの成長と父―子の人間関係」や原聡介「父の座――その変遷と教育的役割」、西島健雄「『父親の権威』再考」などの論考が掲載されている。また、『発達』の一九九三年秋号では、「父親の役割」という特集が組まれている。同誌には、牧野カツコ「子どもの発達と父親の役割」や深谷昌志「変わりつつある父親像」、飯島喜一郎「〈父親の役割〉について考えたこと」などの論考が掲載されている。

（3）　国連の第一回世界女性会議が一九七五年、メキシコで開催されて以来、国家レベルで男女平等に向けた制度改革が進められてきた。一九八五年には「男女雇用機会均等法」が成立し、我が国は国連の定めた「女子差別撤廃条約」を批准した。一九九一年には、子育てと仕事の両立を支援するための条件づくりとして、「育児休業法」も成立した。また、教育の側面では、高校の家庭科が一九九四年に男女必履修となり、その実践が始まった。また同年、選択的夫婦別姓制度の導入などを柱とする「婚姻等に関する民法改正要綱試案」が発表された。

このような「男女平等社会」実現への道筋において、男女の役割が見直されている。父親の子育てへの参加はその一部

である。なお、管見によれば、東京都生活文化局青少年部女性計画課「男女平等社会への道すじ――ガイドライン――」（一九九五年）、大阪市市民局生活文化部女性施策推進課「女性の二〇年――資料集」（一九九七年）、京都市文化市民局市民生活部男女共同参画推進課「第二次京都市女性行動計画（改訂版）――男女が共に自立、参画、創造する都市・京都二一プラン――」（一九九七年）などの出版物が出されている。

（4）父親研究の少なさが、多くの研究者から指摘されている。たとえば、レンツェン氏によれば、「父性の歴史はこれまで記されてこなかった。（中略）それに対して、どこの図書館も、母親と母親らしさに関する著作で満ちあふれている。大きなデータバンクで母親という見出しで検索してみようと思えば、誰でもたっぷりとサービスを受けることはできるのである。母親についての文献リストと父親についての文献リストは、数量的に千対一の関係にある」（Lenzen 1991, S.20）。また、柏木恵子氏によれば、「〝母子関係と子どもの発達〟〝母子相互作用〟〝母と子の絆〟〝～への母親の影響〟〝母性〟といったタイトルをもつ本や論文はまことに数多く、ひきもきらない。これに対して、父親を扱った研究論文は（中略）まだない現状である」（柏木恵子　一九九三、一頁）という。

このように、今まで父親があまり研究されてこなかったことが指摘されているが、八〇年代後半以降、父親がいろいろな分野で注目され、「父親論」の時代とも呼べるほど、父親を巡る議論は活況を呈している。そのなかで、「父性の復権」という主張も行われているように思われる。

（5）「父親になる」ことの困難さは、斉藤学氏の『「家族」はこわい――母性化時代の父の役割』（一九九七年）において、指摘されている。斉藤氏は「あとがき」で、初めは同書の書名を「父親になるための本」（斉藤学　一九七七、二二六頁）と考えていたという。

斉藤氏は精神科の臨床医として、多くの父親とかかわる中で、現在、父親のあり方が問われており、「子へのしつけ、教育における『父親不在』が問題になって」いるという（同上、一頁）。そして、斉藤氏は同書における考察を通して、「今後、どんな父親をやればいいのか」を模索している。

なお、「父親になること（becoming father）」を、「父親であること（being father）」と対置して論じたのは、伊藤公雄氏（伊藤公雄　一九九五、一九四頁）である。

(6) 橋本治『橋本治の男になるのだ』(ごま書房、一九九七)の副題は、「人は男に生まれるのではない」となっている。ここから、示唆を得た。

(7) 母性が重視されていく経緯は、バダンテール『母性という神話』(一九九一)が詳しく考察している。簡単ではあるが、この経緯は「二 『男になる』ことの困難さ——男性学の問題提起——」において述べた。

(8) 「新しい父親」像は、たとえばバダンテール氏が『XY——男とは何か——』(一九九七)において、「母親のようにふるまったかと思うと次にはラグビーをする」(バダンテール 一九九七、二一五頁)父親として提示されている。また、斉藤学氏が『「家族」はこわい——母性化時代の父の役割——』(一九九七)において、「新しい父親」像として、「単に権威的な父ではなく、豊富な女性性をも併せもっている父親、ミルクの出せる父親」(斉藤学 一九九七、二二三頁)を提示している。

なお、林道義氏は「父性をめぐる役割分担について言うと、父性については、基本的には父も母も両方が持たなければならないと考えている。どちらかが一方的に担うべきものとは考えていない。だから私は父親の役割とか性質と言わないで、父性という抽象的な言葉を使っているのである」(林道義 一九九五、二〇七頁)と述べている。したがって、『父性の復権』は確かに「父親」あるいは「男性」に向けたメッセージではあるものの、林氏は「父性」とジェンダーは切り離して考えているように思われる。

(9) 「もちろん、この考えかたは、女性にはあまり支持されない。結果として、役割分担の固定化ということになるからである」(中野収 一九九二、二三二頁)。現在、育児・家事への男の参加は常識化しているのだから、男と女の領分の組み換えを、つまり新しい棲み分けを、ほとんど意識することなく、金切り声などあげないで、模索していくことが重要である。

引用・参考文献

伊藤公雄「第五章 父親のゆくえ——自立と依存のはざまで——」、所収、井上真理子・大村英昭『ファミリズムの再発見』世界思想社、一九九五年。

伊藤公雄『男性学入門』作品社、一九九六年。

落合恵美子『二一世紀家族へ――家族の戦後体制の見かた・超えかた――』有斐閣、一九九四年。
柏木恵子『父親の発達心理学』川島書店、一九九三年。
賀茂美則「いいかげんにしてくれ『父性の復権』論」、所収、『論座』、朝日新聞社、一九九八年一月号、一二八～一三五頁。
河合隼雄「『父性の復権』などできない」、所収、『文藝春秋』、一九九七年一〇月号、二六二～二六八頁。
小浜逸郎、書評「売れてる秘密」、朝日新聞、一九九七年一月二六日。
斉藤学『「家族」はこわい――母性化時代の父の役割』日本経済新聞、一九九七年。
『児童心理』「特集　子どもにとって父親とは」第三七巻第一号、金子書房、一九八三年一月号。
汐見稔幸、長坂典子、山崎喜比古『父子手帖――お父さんになるあなたへ――』大月書店、一九九四年。
瀬地山角「overview ジェンダー研究の現状と課題」、所収、井上俊ほか編『ジェンダーの社会学』岩波書店、一九九五年、二二七～二四三頁。
総務庁青少年対策本部編『日本の父親と子供――アメリカ・西ドイツとの比較――「子供と父親に関する国際比較調査」報告書』大蔵省印刷局、一九八七年。
『大航海』№一九「特集『父』の歴史」、新書館、一九九七年一二月別冊。
高野清純、新井邦二郎編『モノセクシャアル時代の父親学』福村出版、一九九七年。
高橋種昭、高野陽、小宮山要、大日向雅美、新道幸恵、窪龍子『父性の発達――新しい家族づくり――』家政教育社、一九九四年。
中野収『「家族する」家族――父親不在の時代というが…――』有斐閣、一九九二年。
橋本治『橋本治の男になるのだ――人は男に生まれるのではない』ごま書房、一九九七年。
『発達』第五六号、一九九三年秋（「特集　父親の役割」）。
林道義『父性の復権』中公新書、一九九六年。
林道義「河合隼雄氏への反論　『父性の復権』はできる！」、所収、『諸君！』一九九七年一二月号、七八～八七頁。
林道義「反『父性論』の危険な体質　何故に『父性の復権』を怖れるのか」、所収、『諸君！』一九九八年三月号、一二二～一

三六頁。

藤川信夫「父親なき社会の功罪」、所収、中国四国教育学会編『教育学研究紀要』第四二巻第一部、一九九六年、四一～四六頁。
東山弘子・渡邊寛『父をなくした日本人――知恵としての「父」の発見』春秋社、一九九五年。
妙木浩之『父親崩壊』新書館、一九九七年。
比較家族史学会編『事典　家族』弘文堂、一九九六年。
山極寿一『家族の起源――父性の誕生』東京大学出版会、一九九四年。
山極寿一『父という余分なもの――サルに探る文明の起源』新書館、一九九七年。

Badinter, Elisabeth, 鈴木晶訳『母性という神話』筑摩書房、一九九一年。
Badinter, Elisabeth, 上村くに子・饗庭千代子訳『男は女、女は男』筑摩書房、一九九二年。
Badinter, Elisabeth, 上村くに子・饗庭千代子訳『XY――男とは何か』筑摩書房、一九九七年。
Horkheimer, Max, 森田数実訳『批判的社会理論――市民社会の人間学――』恒星社厚生閣、一九九四年。
Lenzen, Dieter, Vaterschaft, Hamburg 1991.
Mitscherlich, Alexander, 小見山田実訳『父親なき社会――社会心理学的思考』新泉社、一九八八年。
Tellenbaach, Hubertus (Hrsg.): Das Vaterbild im Abendland I, Stuttgart, Berlin, Köln und Mainz 1978.
Wild, Reiner: Die Vernunft der Väter. Zur Psychographie von Bürgerlichkeit und Aufklärung in Deutschland am Baispiel ihrer Literatur für Kinder, Stuttgart 1987.

謝辞

藤川信夫氏（広島大学）から、レンツェン教授の“Vaterschaft”（Hamburg 1991）の邦訳をご提供賜ったうえ、さらにご玉稿「父親なき社会の功罪」をご恵投いただきました。ここに深謝申し上げます。なお、“Vaterschaft”は藤川氏の邦訳により、近々、出版社から刊行されるそうです。また、福嶋正純氏（東亜大学）と岡谷英明氏（美作女子大学）からは本稿に関して、

有益な示唆をいただきました。ここに深謝申し上げます。

中央公論社の佐々木久夫氏から、新聞や雑誌に掲載された、林道雄『父性の復権』（中公新書）の書評記事（コピー）をご提供いただきました。ここに深謝申し上げます。

（福岡教育大学　教育史）